

クローズアップ NGO・NPO

社団法人

シャンティ国際ボランティア会 ～小さな絵本の大きなチカラ～

小さな絵本の大きなチカラ

カンボジア難民キャンプで、一人の女の子が言いました。

「お菓子よりも、絵本が好き！お菓子は食べたらなくなってしまうけど、絵本は何度も読めるもん」。食料が不足がちな難民キャンプで、お菓子は貴重品です。それでも、むさぼるように絵本を読む、難民の子どもたち。医療や食料、医療支援ではなく、図書館を開設して、子どもたちに絵本を読んでもらう支援を始めたことに、自信を抱いた時でした。

以来二六年間、シャンティ国際ボランティア会（以下、SVA）は、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、アフガニスタンで、様々な困難に直面している子どもたちの教育を「絵本」と「図書館」を柱に支援しています。私たちの団体の成り立ちと事業についてご紹介します。

一九八〇年、カンボジア難民キャンプ

一九八〇年、私たちはカンボジア難民キャンプで活動を始めました。当時、飢餓と虐殺と強制労働で悪名高いポルポト政権が崩壊し、カンボジアの人々は一斉に国境を越え、難民としてタイに流入しました。タイ国内に設けられた難民キャンプに調査に入った私たちの目に飛び込んできたのは、難民の数のおびただしさ、目も覆うばかりの惨状でした。キャンプでは、既に欧米のボランティアが

緊急援助活動を行っていました。が、当時の私たちには、彼らのような食料や医薬品を調達する能力がありませんでした。そこで、難民の人々が少しずつ健康を回復した時に必ず必要になってくる精神的な援助、「教育支援」を行うことにしたのです。

絵本を「食べる」子どもたち

まず私たちは、カンボジア系タイ人の住む東北タイの農村を歩いてカンボジア語の本を探し出し、軽印刷機で複製しました。また、日本語やタイ語の絵本をカンボジア語に翻訳し、その訳文を絵本の一ページに貼り付けて、カンボジア語の絵本に改造しました。そして、マイクロバスにこれらの本を積み込み、難民キャンプの中で巡回図書館活動を始めたのです。

難民キャンプの広場で車を止め、絵本を見せると、子どもたちが集まってきました。戦乱に翻弄され、初めて絵本を目にする子どもがほとんどでした。広場はあつという間に子どもで埋め尽くされ、手に取った絵本をむさぼるように読んでいました。食い入るように絵本を読む様子を見て、ある人は「蚕が桑の葉をサワサワ音を立てて食べているよう



↑カンボジア難民キャンプのSVA図書館で絵本を読む難民の子どもたち(1981年)

社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA)

〒160-0015 東京都新宿区大京町 31 慈母会館 2・3F TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220

E-mail : info@sva.or.jp URL : http://www.sva.or.jp

だ」と表現しました。冒頭で紹介した女の子には、こんな活動の中で出会いました。子どもたちにとつて、絵本からカンボジア語を学び、知識を得て、カンボジア文化を吸収する数少ない教育の機会でした。活動は徐々に大きくなり、難民キャンプの中に常設図書館を設けて、より多くの難民の子どもたちが絵本に触れられるようになりました。



↑アフガニスタンのSVA子ども図書館には毎日100名もの子どもが訪れる。(撮影 安井浩美)

絵本と図書館の「生きる勇氣と希望」

難民キャンプで育った、チャトラというカンボジア人男性のことを紹介します。彼は一九八六年カンボジアの首都プノンペン郊外に生まれました。ポルポト政権時代に、警察官だった父と母が処刑され、五人兄妹のうち、弟一人と妹一人は栄養失調で亡くなりました。チャトラさんは一人山に逃れて二年間潜伏し、ポルポト政権崩壊とともに命からがら難民キャンプに逃れました。孤児になったチャトラさんは、ごみ拾いで生計を立てながらキャンプ内の学校に通い、SVAの図書館で本を読みました。彼は言います。「ポルポト時代を経て難民キャンプの生活で、カンボジアの人々は疲れ果てていました。子どもたちも笑顔や希望を失って絶望の中で生活していました。でも図書館で本に出

会うことによって子どもたちに笑顔が戻ったのです。子どもが元気になると大人も元気になりました。そしてキャンプに活気がでて、大人も子どもも生きる勇氣と希望が湧いてきたのです」。

苦難に満ちた少年時代を過ごした彼は今、SVAプノンペン事務所図書館事業課副責任者として働いています。自分の経験から教育の大切さを知っている彼は、SVA図書館活動を通してカンボジアの子どもたちの教育を支援したいと考えています。

アフガニスタンの子ども図書館

アフガニスタンでも、事業の中心は「絵本」と「図書館」です。アフガニスタン東部のジャラバード市内で運営する「子ども図書館」には、親を亡くした子どもや経済的に苦しい家庭の子どもなど毎日一〇〇人もの子どもたちが訪れて、SVAが現地で出版したオリジナル民話絵本などを読んでいます。また、いっばいの絵本を詰め込んだ図書館の



館活動。スタッフによる絵本の読み聞かせ。後方には移動図書館車が見える。(撮影 瀬戸正夫)

して、図書室のある学校の建設を進めており、現地の子どものための教育をハードとソフトの両面から支援しています。

「共に生き、共に学ぶ」

紙幅の関係で紹介できませんでしたが、このほか、タイ国内の都市スラムや農山村、タイ国内に設けられたミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、ラオスなどでも「絵本」と「図書館」を柱に教育文化支援活動を行っており、各国合わせて年間約四〇万人の子どもたちの教育を支援しています。また、阪神淡路大震災やインドネシア・ジャワ島中部地震、新潟県中越沖地震など、国内外の災害への緊急救援活動を行っています。

自治体主催のスタディーツアーや国際協力イベントなどで協働した体験も多数あり、今後も私たちが自治体の皆さまと協働できることがありましたら、大変ありがたいことです。

また、冒頭で紹介した、日本語の絵本に現地語の訳文を貼り付ける「絵本を届ける運動」や、毎月二〇〇円の支援で図書館活動を応援する「チャイルド・ブック・サポーター」など、個人の支援プログラムも行っています。一人ひとりの支援を、現地の一人ひとりの子どもに結びつけ、すべての人々が「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会を実現するために、これからも教育文化支援活動を続けていきたいと考えています。